

トンホーチューー      シャアグオチューー      シアオチイ  
〔同和居〕と〔砂鍋居〕、そして小吃など

—奥野信太郎先生と北京食単—

【サマリー】

ばい ろん  
重 森 貝 崙

中国文学者・奥野信太郎先生は筆者の師といえる存在である。この師は普通の大学教授の枠内には収まらない異色の学者であった。最もピッタリくる形容は〔中国大人風の文人学者〕であろうか。随筆の名手としても知られていた。

昭和11年から13年(1936年～1938年)到北京の地を踏み、閑静な住宅街に居を構え、研究者・生活者としてさまざまな体験をしながら、その森羅万象を名随筆として紡ぎだした。これが東洋文庫に収められた「随筆北京」である。なかでもその白眉は〔北京の食〕を巡る話柄で、表題の如き老舗の料理屋、そして小吃(軽食)などを描いた世界は、読者に思わず生唾を飲み込ませしむる名文である。